

平成 30 年 10 月 30 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880002

氏名 一柳 絵美
(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

- 派遣先: 都市名 ミュンヘン (国名 ドイツ)
- 研究課題名 (和文) : 福島第一原発事故後のエネルギー政策決定プロセスの日独比較
- 派遣期間: 平成 30 年 4 月 1 日 ~ 平成 30 年 9 月 30 日 (183 日間)
- 受入機関名・部局名: ミュンヘン工科大学 バイエレン公共政策大学院
- 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

研究内容

本研究は、福島第一原発事故後の日独エネルギー転換政策プロセスのなかで審議会・委員会に着目する。本研究の特色は、市民や専門家の政治的役割を分析し、民意がいかに関与に反映されているかを解明しようとする点である。ドイツ派遣中は、Miranda Schreurs 教授の環境・気候政策研究室に在籍し、日独比較のうちドイツの事例研究に重点を置いた。なかでも注目したのは、ドイツの放射性廃棄物の最終処分場探しを議論する「国家附随委員会 (NBG)」である。本委員会は、市民が委員として選出されている特殊な事例である。研究滞在期間中、ドイツ各地で開催された本委員会の全ての公開ミーティング計 5 回と市民公聴会に参加し、議論を傍聴、非公開の貴重な音声データや配布資料・関連文献を入手した。また、委員会の市民代表委員や専門家および国会議員ら 11 名、そして本件に関心を持つ市民たちにインタビューをした。他にも、ゴアレーベンやルブミンの放射性廃棄物中間貯蔵施設や、再生可能エネルギーの発電施設、デモ活動を視察し、担当者にヒアリングを行った。結果、ドイツにおける市民や専門家の政治参加、政策ネットワーク、委員の人選、政策決定の背景の一端を理解できた。

研究状況・発表

研究内容は、5 月に Schreurs 教授と Wurster 教授のゼミで発表し、両教授や Hagemann 氏などからいただいたフィードバックを基に研究デザインを改良した。Schreurs 教授からは、定期的な面談で、市民・専門家の政治参加に関する研究理論やインタビュー方法等について大変有意義なご助言をいただいた。研究滞後半には、以下、3 つの国際会議で研究内容を発表した。(1) 22nd REFORM Group

Meeting, Salzburg; (2) 4th Energy and Society Conference: Energy transitions in a divided world, Exeter; (3) Japan at a Crossroads: Perspectives on Japan's Long-Term Sustainability, Raitenhaslach.

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

研究成果発表等の見通し

来年度は、ミュンヘン工科大学の研究者 Koppenborg 氏らとともに、国際会議での日独エネルギー転換政策に関する共同発表を目指す。そのために、現在、研究発表要旨の提出準備に取り組んでいる。これから、国際会議にむけたフルペーパー執筆、中長期的な研究連携やエネルギー転換に関するワークショップの実現を目指して協業していく。

また、Schreurs 教授からお声かけいただいた共同執筆の構想もある。これが実現すれば、国際的な成果発表の場として重要な意味を持つと考えられる。この構想にむけ、自分の担当部分の執筆準備を始める。

博士論文が完成したら、ドイツの財団のホームページで公開見込みである。この財団は、ドイツで年 1 回、博士論文研究発表・研究者交流の場を設けている。そこで口頭発表とポスター発表を行う予定である。ドイツをはじめ世界各国で再生可能エネルギーやエネルギー転換の研究に取り組む様々な分野の研究者と学際的な研究交流を行い、博士論文研究成果を国際的に発信したい。

今後の研究計画の方向性

まずは、ドイツでのインタビュー調査・文献調査・委員会傍聴で入手した資料及び音声データの分析を行う。そして、ドイツの事例研究部分に関わる論文を執筆する。つづいて、日本の事例研究にとりかかり、日本でのインタビュー調査を実施する。来年度もドイツに短期研究滞在し、補足的なインタビュー調査を行う見込みである。日独両国の事例研究をまとめる形で博士論文を執筆する。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラムのおかげで、ドイツのエネルギー政策に関わる研究者との既存のネットワークをさらに拡大し、近い将来の共同研究への一歩を進めることができた。たとえば、日独エネルギー転換政策研究に関する国際連携強化を目指して、前述の Koppenborg 氏と共同で若手研究者交流の公募に応募し、採用された。今後、研究連携の具体化にむけて作業をすすめる。ほかにも、研究室の Ćetković 氏らと ECPR (European Consortium for Political Research) の会議に参加し、エネルギー政策に携わる欧州各国の研究者との新たなネットワークを構築した。

Schreurs 教授の研究室は、世界各国出身の研究者、大学院生や客員研究員が在籍する開放的な雰囲気だった。食事中やカフェタイムにも、多様なバックグラウンドをもつ研究者の間で、国際的な政治情勢について毎日のように熱い議論が繰り広げられており、刺激を受けた。また、世界的に著名な研究者から同世代の若手研究者にいたるまで、幅広い年齢層の研究者と将来の研究構想について意見交換をし、数多くの学術的なアドバイスを受けることができたのは大きな収穫だった。Ohlhorst 氏からは私の研究の核となるドイツ語のインタビューの質問票の内容について、丁寧にアドバイスをいただいた。おかげで、ドイツでのインタビューの仕方、質問の構成を大きく改良することができた。また、オン・オフの切り替えが上手い研究室の仲間と過ごす中で、研究への集中の仕方、研究生活における効率的な休息の取り方を学んだ。

ドイツ滞在中に痛感した今後の課題もある。英語・ドイツ語の能力不足、そしてその土台となる日本語の語彙力不足、プレゼンテーションで簡潔明瞭に研究内容を伝える力の欠如である。これらについては、少しずつ改善に努めたい。